

理論編
実践編

宇宙意識という視座

Dr. for the Earth

地球のお医者さん

平井孝志

オーガニック農法・農業編・畜産編

オーガニックで健康ライフ

生命の系

循環と共生の根理

科学と経済の陥穽

物質の系

Dr. for the Earth

地球のお医者さん
平井孝志

正食出版

発刊によせて

関西弁にボディアクション。聴衆席から笑い声。寄席を見にきたような感覚。

平井孝志先生の講演は実にテンポ良く、難しい話になりがちな環境問題、農業・食糧問題が平易に解説されていきます。守備範囲は広く、水分子から宇宙、微生物から東洋哲学まで、平井先生の話の中ではあらゆる分野が結合し、一つの「平井理論」を形成しています。もちろん食材、食事をいただく時の作法、夫婦関係、教育など、私たちの生活に直結した話題も盛りだくさん。聞き終わった後の感想は、「ああ、面白かった」。

現代の人間社会は崩壊寸前です。環境の危機、地球の危機などと声高に叫ばれていますが、自然環境や地球はちっとも危機的状況などにはありません。人間が滅びても、姿を変えた自然環境は存在しますし、地球の悠久の時間はこれからもゆっくり流れていきます。問題の「捉え方の違い」なのです。さまざまな科学技術の使い方を間違ったから、社会構造の矛盾を解決せずに先送りしてきたから、人間だけが罰を受け滅びようとしているのです。地球から搾取し、地球に寄生するだけの人間は、地球のシステムから排除されてしまいます。「自業自得」とい

う地球様の声が聞こえてきそうです。近い将来、人類は生き残っているかもしれませんが、もはや人間と呼べる存在ではいられなくなっているのではないのでしょうか。

ただし人間の危機に直面して、私たちの意識も少しずつですが変わってきました。私たちは今何をすべきなのか、これからどんな社会をつくり、どんな技術の普及を目指すのか、現代人は模索し始めています。そんな意識の芽生えた現代人にとって、平井先生の理論は一つの道を示してくれます。人間として、日本人として、地球人として、そして宇宙人として、現代の人間生存環境の危機を乗り越えるためにどうしたらいいのか。そのことを追求すると、先人たちが残した易の原理へと踏み込まざるを得ません。平井先生はその道を、思考方法と実践で表現してくれています。「技術なき思想は無用である。思想なき技術は有害である」とは、食を通して易の原理を説かれた桜沢如一先生の言葉です。この言葉の現代の実践者こそ、平井先生にほかなりません。

先生の提唱する新しい概念「自然学」と「エコビリティ(環境指標)」は、私たちの生活観を一変させるでしょう。エコビリティを導入すれば、金融も流通も科学技術も、本当に人間に役立つものに変貌する可能性があります。利便性だけの追求や欲望の満足だけのための技術や金融は、もう必要ないのです。そして、先生の自然学をもとにすれば、新しい地球と人間の関係

が創られる可能性があります。私たちは生かされている、生きることを許されている生命です。生きていることに感謝して、初めて地球にその存在を認めてもらえるのです。先生の「自然学」「エコビリティ」は、こうした視点に立ってこそ、ようやく理解できます。何事にも謙虚さが大切だということを、あらためて実感させてくれます。

内外からの要望を受けて、正食協会・正食出版で平井理論の集大成をともくろみつつ、今回、出版の運びとなりました。お忙しい平井先生の手を煩わせ、講演記録を集め、関係者を総動員しての試みとなり、きつとご満足いただける内容に仕上がったことと自負しております。理論と実践を兼ね備えた平井節をご堪能ください。

平成二十一年一月吉日

正食協会会長 岡田定三

はじめに

——「地球に優しい」なんて言うとの間はあかん」

環境に対する意識が高まってきたという。新聞やテレビでも環境に関する話題が尽きない。その多くは産業廃棄物の不法投棄、環境ホルモン（内分泌攪乱物質）による人体への悪影響を憂える内容であったりする。焼却場から発生するダイオキシンの問題がクローズアップされたことは、まだ記憶に新しいところだ。

しかし「環境」とはそもそも何なのだろうか？ どうしてこれほど「環境問題」がマスコミを騒がせる世の中になったのだろうか？ 科学も発達し、経済も世界中で比類の無いほど発展を遂げた日本に、いったい何が足らないのだろうか？

「地球に優しい」という言葉が市民権を得てきたようだ。ある会合で、「環境に対する意識も取り組みも相当の高まりを感じますが、どう思われますか？」と聞かれた。その問いに対して答えたのが冒頭の言葉である。

質問者にとっては意外な答えだったのだろう、すかさずその理由を聞かれた。「何ですか？」

「立場とか視点の違いをちゃんと理解したうえで使っている方は結構。そうでない方は、何であかんのか、何があかんのか、少し考えてみてください」と前置きして次のように話した。

「“さんまい”という言葉をお聞きになったことありませんか。漢字で“三昧”と書きます。好き放題にお金を使うことを贅沢三昧といいますけど、その三昧とは違ってます。三昧というのは仏教用語（梵語 samādhi の音訳）で、念仏三昧とか読経三昧など、一心不乱に修行することです。キリスト教でも瞑想、禅では只管打坐しかんたざといえますなあ。

じゃあ、お坊さんは何のために三昧行してはるんですか？ そう、一心不乱に修行をして、無我の境地に入るためです。無我の境地、それがどんなもんか、私にはわかりません。わかりませんが、われわれ凡人が真似事でもできないような厳しい修行をしてまでも、“我”を無くするのは難しいと言いうことですかなあ。

もう、お解りでしょう。何で、こんな話をするかというと、『地球に優しい』とは誰がどういう立場で言うてんのか、それこそが問題やということがわからんと、環境問題は解決できっこないし、社会が変わるはずもない。環境に対する視座に“我”を持ち続けた結果が今やということを見つめなあかんです。

言い換えれば、自分がどついた相手に向かって『人には優しくしましょう』という標語を、

スケールを大きくしてもっともらしく唱えてるのが、『地球に優しい』という言葉と違いますか？ 地球環境を傷つけてきたのは、ほかでもないわれわれ人間じゃないんですか？

立場を変えて、自分が地球になったつもりでこの言葉を聞いてご覧なさい。清浄な空気、美味い水、それらを育む森、さらに生命を与え続けてきたにもかかわらず、排気ガスで空気は汚すし、オゾン層は傷めるし、川や湖や海は汚すし、木を伐って森はなくすし、何か地球に良いことしてくれた？

そんな人間が改心して行動を改めたならまだしも、現状維持どころか、ますます経済発展に力を入れ、標語だけは、地球に優しい商品？地球に優しい行い？

ほんまに地球のことを思って言うなら、『優しい地球に感謝』と違いますか。そういう意味で使わんと、なんぼ「優しい地球」でも、しまいにはおこるで！」

9

自然のありのままを素直に学ぶことを私は「自然学」と呼んでいる。

学究機関で行われているところの、自然を部分的に取り出し、原理原則究明のために複雑な要素を排除し、系を単純にした中でなされる科学とは、少なからず意を異にしている。

環境や人間を含む動物や植物などの生き物を前にしたとき、あふれんばかりの知識と情報を

有した私たちは、自然を自然として観ず、自然の一部の事柄についてだけ、自らの記憶と知識に合致する部分を寄せ集めて理解しようとする。

私たちは、自らの記憶に残る乏しい知識と対象とする理論や現象が一致したとき初めて理解できた満足し、そうでないときは否定し排斥する傾向がある。

主張する側は、相手の主観に左右されないよう、多くの実験から得られた膨大なデータを積み重ねて自説を証明しようとする。互いにそのようなことを繰り返すうち、何事にもデータを求めるようになり、データに裏打ちされない理論や説明は価値のないものとして片づけるようになる。

私たちは「価値は数字であり、数字にできない価値など存在しない」と信じるようになってきているのだ。

私は科学や技術を否定する者ではない。自分も科学者の端くれだと思っている。科学は素晴らしい功績を残してきた。今日の文明社会は、科学の功績なしにはあり得ないし、科学に裏打ちされた技術によって成り立っているといても過言ではない。

しかしそれほど科学や技術が発達し、情報網が発達してきたにもかかわらず、川は濁り、海は汚れ、森林は枯れ、大地は疲弊し、環境ホルモンは漂い、戦争や犯罪はなくなり、病人は

増え続けているのが、世界の偽らざる現状だ。

5

一九九二年、ブラジルのリオデジャネイロで国連地球環境サミットが開かれた。小生の活動もビデオで紹介していただいたが、それに先だって、当時の国連事務局長モリス・F・ストロング氏と会談させていただいたことがある。NGO団体の京都フォーラム（座長・清水栄京都大学名誉教授）のご紹介であった。

ストロング氏とさまざまな分野で意見交換をした中で、忘れがたいのは、“What's your major?”（ご専攻は？）という、定番ともいえるいつもの質問を受けたときのことだ。

この質問に対する答えは〇〇学や〇〇研究などと言うのが一般的だが、独自の自然学を提唱する私は次のように答えた。“I define myself as a Dr. for the Earth.”（私は自分を地球のお医者さんだと称しています）

半分以上本気で言ったのだが、ウィットに富んだ表現と受け止められたのかもしれない。とにかくストロング氏には随分気に入っていただいた様子であった。

もちろん地球の医者を養成する学校はない。そのような学位を与えられる者もない。しかし私は、病んでいる地球環境を少しでも改善できるよう活動すること、そのために真摯に実践

する人々はすべからく「地球の医者」であると考えている。自分もその一人であるという自負心から、名刺にも Dr. for the Earth と印刷している。

5

本書は二部構成になっている。第一部は理論編、第二部は実践編。理論編では、「環境」「イノチ」「健康」というものに取り組むにあたって、小生が諸先輩方から教えていただいたこと、実践者の方々から学ばせていただいたことを、幾つかのキーワードを掲げながら紹介している。なお、第七章については、愚息、平井芳典の執筆原稿とJON Aの松本憲二氏の特別寄稿で構成した。

第一部の理論や理屈に対し、「真理は現象の中にある」「百の理論より一つの実践」というわけで、第二部では、畜産業界の常識を覆す無投薬飼育、長期高度熟成堆肥を用いた実例、殺菌剤や殺虫剤を一切使用しない無農薬無化学肥料栽培など、各フィールドで真剣に実践されておられる方々に寄稿いただいた。

そこに見え隠れするそれぞれの経験を通しての哲学や実践技術は、一朝一夕にできたものではない。いずれも試行錯誤を繰り返した結果、やっとの思いで確立されてきたものだ。

本書の構成上、まず第二部から読み進め、次に第一部で理論的背景をご参照いただくという

ことでも一向に差し支えない。

また、巻末資料編には、一九九二年より行っている河川浄化について、和歌山県の田辺市役所からの最新報告を掲載した。興味のある方はご一読願いたい。

千変万化する自然に対して、私たちのこの一冊がどれほどの力を持つとも思えない。しかし「千里の行も足下に始まる」という言葉もある。本書が、環境や環境問題に関心のある方、そして実際のフィールドでご活躍の方々にとって、一部でもご参考になるようなことがあれば、編著者としてこれにまさる喜びはない。

一九九九年秋

平井孝志

ご注意

- 1 掲載文書は執筆時の生データを基にしていますので、推敲を経て実際に出版された文章とは若干違う場合があります。悪しからずご了承下さい。
- 2 リンクはどのページでも確認不要です。
- 3 商品宣伝・商用目的の引用についてはお断りする場合があります。
- 4 本サイトに掲載されている記事・コラム・解説文・写真・その他すべての無許可転載を禁止します。あらゆる内容は日本の著作権法及び国際条約によって保護を受けています。